



今月のことば

monthly word

運慶展と廃仏毀釈

日本弁理士会 副会長

本田 淳

仏像ブームです。今年の目玉は春の快慶展、秋の運慶展でした。東大寺の仁王様を造った鎌倉仏師の運慶・快慶です。奈良会場の快慶展は10万人超の来場者でしたが、東京会場の運慶展は開始2週間で10万人を超え、最終的には50万人に迫るでしょう（期間11/26まで）。仏像ブームのきっかけは平成21年の阿修羅展であり、東京会場91万人、九州会場71万人でした。アクティブシニアといわれる団塊の世代が集うとともに、仏ガールといわれる若い世代も仏像に興味を持つようになりました。

全国に31体あるとされる運慶作品のうち22体が揃う、かつてない展覧会です。運慶展の開館時間は夕方5時までですが、私は旅行会社による夜のツアーに行ってきました。夜6時半から8時半まで貸し切りです。貸し切りといっても、600人で貸し切ったことになりまますので、人が多く、並の展覧会の混んでいる状態でした。並ばなくて入れたのですが、昼間は長時間待ちだったのでしよう。

運慶展の公式サイトも力が入っており、「さいとう・たかをの劇画で『運慶』」では、運慶の生涯を漫画で紹介するとともに、「運慶学園」ではみうらじゅん、篠原ともえ、パトリック・ハーランといった仏像好きタレントによる「授業」があります。「入学」すると、慶派に入門でき、「○慶」の名を毛筆体で与えてくれます（私なら淳慶）。クリアファイルや絵はぎのグッズ販売はいつものことですが、「もちもち邪鬼ポーチ」は1ヶ月以内に完売し、通販サイトにて予約受付となりました。運慶が造った仏像自体は、新発見はあっても、今現在において新たに作製されて増えることはないのですから、如何に魅力的に見せるか、解説するかは重要です。

仏像は信仰の対象であるとともに、美術鑑賞品としての側面もあり、細かな模型のようなフィギュア好きな日本人の感性に合っていると分析さ

れます。本来は拝む対象の仏像を、展覧会に出品するというのは、寺院側が柔軟に対応しているとも言えるでしょう。

多くの入場者を集めるには、博物館、寺院側の努力もあると思います。

運慶が生きた時代を振り返ってみます。東大寺は平家による南都焼き討ちに遭いましたが、修復事業に邁進し、単に以前と同じものを再生するのではなく、新たに工夫して南大門の仁王像を造りました。鎌倉幕府が成立し、政治の中心は京都から、関東の鎌倉へと移りました。つまり仏像制作の発注者（ユーザー）は、優美さを好む貴族から、質実剛健を範とする武士へと変化していきました。それまでの平等院鳳凰堂にあるように優雅に微笑む仏像から一転して、血管が浮き出て、筋骨隆々で、歌舞伎のように見得を切ったポーズをする人間らしい、躍動感あふれる仏像を造りました。阿弥陀如来や大日如来といった、仏さまの中でもポーズが決まっているものとは別に、仁王像や毘沙門天像、八大童子像といった制約が比較的少ない仏像において、人間らしさを重視したのも、運慶の写実性を発揮する上で重要と思われます。実際、運慶の仏像は、近畿だけでなく、関東にも点在しており、関東武士という新たなユーザーに寄り添ったのでした。

さて、現在の仏像ブームにおいて、運慶展でも、入場者で一番多いのはアクティブシニアであり、定年退職したシニア世代のうち、趣味に邁進したり新しい事に意欲的に取り組んだり、旺盛な意欲を持つ人々がこの世代とされています。ただし、その次の団塊ジュニア世代が、親の世代ほどに仏像に興味を示すのか、疑問が残ります。仏教行事そのものに触れる機会が減っていることは、檀家数の減少によって経営に苦しむ寺院が増加していることにも見られます。となると、次の仏像ブームを支えるのは外国人のインバウンドでしょうか。実際、運慶展の会場でも、中国語、韓国語

による説明が多く見られ、音声ガイドも、日本語と英語のみならず、中国語、韓国語が完備されています。中国では、数十年前に宗教が規制された時代もありましたが、いま、経済競争の中で仏教ブームも起きているとのこと。

このように親しまれてきた仏像ですが、過去には受難の歴史もありました。明治初期のいわゆる廃仏毀釈です。仏像や寺院が次々と壊され、売られていきました。多くの僧が還俗して、廃業していきました。

長年、日本では寺院と神社が一緒に祀られることが多く(神仏習合)、神社の中にお寺があったり(神宮寺)、お寺の中に神社があったりしました。しかし、明治維新により、国家神道を強化するにあたり、神仏分離令が出され、寺院と神社を分離することになりました。すなわち「神仏分離令は『仏教排斥』を意図したものではなかったが、これをきっかけに全国各地で廃仏毀釈運動がおこり、各地の寺院や仏具の破壊が行なわれた。地方の神官や国学者が扇動し、寺請制度のもとで寺院に反感を持った民衆がこれに加わった。これにより、歴史的・文化的に価値のある多くの文物が失われた。」(Wikipedia「神仏分離」)とあります。

つまり国の政策としては、寺院と神社の区別をつけるに過ぎなかったのですが、現実には神社が残され、寺院や仏像が破壊されることになりました。廃仏毀釈がなければ現在の国宝は3倍はあったらろうとの説もあり(梅原猛)、古美術ファンにとって口惜しい気持ちでいっぱいです。国の財産としても損失でした。

ここで、廃仏毀釈の遠因としての寺請(てらうけ)制度ですが、「江戸幕府が宗教統制の一環として設けた制度。寺請証文を受けることを民衆に義務付け、キリシタンではないことを寺院に証明させる制度」(Wikipedia「寺請制度」)でした。「寺請制度の確立によって民衆は、いずれかの寺院を菩提寺と定め、その檀家となる事を義務付けられた。(中略)各戸には仏壇が置かれ、法要の際には僧侶を招くという慣習が定まり、寺院に一定の信徒と収入を保証される形となった。一方、寺院の側からすれば、檀信徒に対して教導を実施する責務を負わされることとなり、仏教教団が幕府の統治体制の一翼を担うこととなった。僧侶を通じた民衆管理が法制化され、事実上幕府の出先機関の役所と化し、本来の宗教活動がおろそかとなり、

また汚職の温床にもなった。この事が明治維新時の廃仏毀釈の一因となった。」(Wikipedia 同)というものです。

すなわち寺院側としては、江戸時代の200年以上に渡って、経済的に豊かで、社会的にも高い地位を保証してくれる寺請制度でしたが、民衆にとっては不満の元となってしまいました。こういった不満が、西洋文明に追い付くことを急務とした明治初期の脱亜入欧、和魂洋才といった社会的情勢において、新しく変化するために古いものをうち捨てる廃仏毀釈といった形で爆発してしまうことになりました。そのような時代でも、破壊されずに住民によって慕われ守られて、現在まで残った仏像や仏教建築があることは注目に値すると思われまます。奈良興福寺の五重塔も売りに出され、釘を取るために燃やされる寸前のところ、延焼の懸念や、住民からの請願で燃やされず、今日に残ったという話もあります。東京国立博物館にある法隆寺宝物館も、明治11年に法隆寺から皇室に献納された宝物からなっており、なんとか国家的宝物を散逸から守ろうとしたのでした。

さて、知的財産や弁理士について当てはめて考えるといかがでしょうか。コンピューターの高速化に支えられたAIの躍進、著作権とフェアユースの問題など、知財や弁理士を取り巻く社会状況は目まぐるしく変化しており、10年後はなんとか想像できるとしても、30年後、さらに50年後は予測困難な時代です。基本的には知財が保護される現在は、大きな流れではプロパテントと思われまますが、いつアンチパテントになるか分かりません。諸外国との関係はどのようになっていくでしょう。大企業、中小企業といったユーザーはどのように変わっていくのでしょうか。知財の魅力は十分にユーザーに伝わっているのでしょうか。ユーザーの不満の元にならないよう、知的財産に関する専門家としての弁理士は、知財と産業の発達に真摯に向き合っていくことが必要でしょう。

また弁理士会は、今年度は広報戦略の柱を立てるべく、会員向けのインナー調査、ユーザー向けの OUTER 調査を実施し、広報の攻め所を見極めるとともに、新たなメディア展開として弁理士を主人公とする漫画も制作してきました。弁理士会は様々に広報をしていますが、まずはユーザーの信頼を増大すべく、日々の努力を重ねて参ります。